

---

# 秋の出来事

凪沚

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秋の出来事

### 【Zコード】

N5451C

### 【作者名】

風汎

### 【あらすじ】

寒さを堪えながらの授業中、一人の少年に会いつ。

中学二年の秋。

部活を終えた僕らは、受験勉強に熱を移し始めていた。

秋なのに色付くのが遅いイチョウの葉を、指でくるくると静かに回す。無意味に寒くなり、すべてが青から赤に変わらうとする景色は僕を魅了した。

固くなつた空気は透明でガラスのように尖つていた。

「集合」

次の瞬間には広がつていた。体操服の袖を手の平まで伸ばし、寒さを凌ぐ姿が多く見られた。自分もその中の一人で必死に寒さと戦つていた。

「いち、に、さん、しー」

体を動かすと隙間が出来る。そこに容赦なく流れ込み僕の体を冷やした。冷やしては温め、冷やしては温める。これこそ無意味の最終形態だ。

氷を作つては水に戻すの繰り返し。

本当にあの教師は教員免許を持っているのだろうか？あのヒゲ面で教師と名乗っているのが犯罪だ。熊だ。奴は熊だ。

そんなことを考えている間に体操は最後の深呼吸に入らうとしていた。

「いち、に、さん、しー、いー、るく、ひち、はち」

腕を上げて空気を吸うと肺が綺麗になつた気がした。

何度も何度も吸つて、僕の肺は黒っぽい色から透き通つた赤に変わつただろひ。

そして一度目の集合に従つた。

「待つて」

誰に向けた言葉かわからぬけれど声の方に振り返つた。

イチョウの木が並ぶ鮮やかな色の中、一人の少年を見付けた。

周りを見渡しても声に気を止める人は居なかつた。

少年は舞い散る木の葉を一つ拾い上げると、僕に駆け寄つて來た。僕の前に止まると荒れた息を整えて一言。

「あげる」

差し出されたのは先程拾つていたイチョウの葉。他の葉とは違い、色が濃く形も綺麗だつた。

「あ、ありがとう」

「どう致しまして」

それだけ言つと少年は、僕に背を向けて歩き出した。

焦げ茶色のパークーを着ていて、秋を思わせる色合ひ。すく秋という季節が似合つていた。

見送る訳じやないけれど、少年の後ろ姿を見続けた。

「田辺ー」

「お、おう今行く」

一瞬目を離した隙に少年は居なくなつてしまつた。  
イチョウの木、広いグラウンド、寂れた校門。  
どこに目を向けても少年は見当たらなかつた。  
秋に消えていた。

授業が終わりグラウンドから教室に戻るとき、もう一度見回したけど少年の姿は見当たらなかつた。

ざわついた教室の中で着替えを終え、大人しく席に着いた。窓際のこの席は外の景色が見渡せる。グラウンドは見えないが、グラウンド側から吹かれた風に木の葉が舞つていた。  
アスファルトの上で円を描いたり、吹き上げた風に乗つたり、楽し  
そうにカラカラ鳴り響いた。

あの少年は何だつたんだろうか？貰つたイチョウの葉を取り出す。  
光に透かしても裏に返しても何も書いていなかつた。

「田辺集中しる」

「はい、すいません」

いつの間にか始まつていた授業。

本当何だつたんだろう?

イチョウの葉をそつとノートに挟み込む。気になつて仕方ない。

そんな秋の出来事。

小さな小さな出来事。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5451c/>

---

秋の出来事

2010年11月12日01時57分発行